＜投 稿＞

# 語学マニュアルの拡充に向けて
## ——辞書の引き方を例として

林 哲 也

## 1. 本稿の目的

図書館資料には，さまざまな言語が使用されている。洋書の場合，件数的には英独仏露語が多数を占めるが，ときには日頃なじみの薄い言語にも対処しなければならない。主として洋書の目録作成業務の手引書として，各種の実用的な言語マニュアル類が公刊されてきた。しかし，たとえば個別言語の辞書の引き方を解説したものが見当たらない等，その内容には不足を感じることがある。共有されるべき技術知としての語学マニュアルを，より充実させることの必要を訴えることが，本稿の目的である。

## 2. 語学マニュアル類の現状を展望する

言語の数は，日常用語では「n カ国語」という数え方をするので，あたかも国家の数と同じく百数十程度であるかのような錯覚を招く。しかし，圧倒的多数の言語は，いずれの国家の「国語」でもない。個々の言語の使用地域の境界線は，国境線と一致することの方がむしろ稀である。複数の言語を公用語とする国もあれば，逆に複数の国で常用されている言語もある。世界の言語の数は，数千種類といわれ，正確な数は不明である[1]。古今東西のあらゆる言語に個人レベルで習熟することは，不可能かつ不必要といえる。実務上必要となる言語は，主として，国際的な通用範囲の広い大言語で，その数は限られている[2]。

洋書の目録作成業務のための知識・技術・留意事項を列挙した包括的な語学マニュアルとしては，

① 丸山昭二郎編『洋書目録法入門. マニュアル編』東京，日本図書館協会，1988，310p.（図書館員選書，7）

があり，世界の言語文化の多様性を，暦[3]や人名[4]の慣習を含めて手軽に瞥見するには便利なものである。その前身に相当する，

② 丸山昭二郎，井上哲也共編『洋書目録マニュアル』東京，日本図書館協会，1970．282p. は，①が割愛している翻字表等も収載している。

多数の言語の文法的特徴の略述および翻字表を集成したものには，

③ Von Ostermann, George F.; Giegengack, A.E. : *Manual of foreign languages : for the use of printers and translators*. 3rd ed., rev. and enl. April 1936. Supplemets compiled by Fujio Mamiya. Reprinted ed. 2nd rev. Tokyo, F. Mamiya, 1970. 347, 56p.

がある。これは第3版（1936）のリプリント（1970）であり，下記第4版（1952）での改訂箇所は反映されていないが，そのかわり，間宮不二雄による独自の補遺が追加されている。

④ Von Ostermann, Georg[e] F. : *Manual of foreign languages : for the use of librarians, bibliographers, research workers, editors, translators, and printers*. 4th ed., rev. and enl. New York, Central Book, 1952. 414p.

対象をヨーロッパ系の言語（英語を除く）に限った，

⑤ Allen, C.G. : *A manual of European languages for librarians*. London, Bowker, 1975. 803p.

---

はやし てつや：筑波大学附属図書館
キーワード：外国語，洋書目録法，業務マニュアル，辞書

は，印刷物・出版物を扱う実務に直接役立つ注意事項の解説が充実している。

ロシア語については，

⑥　宮島太郎著『ロシア語図書目録法入門』東京，龍溪書舎，1981. 235p.（図書館整理技術研究会モノグラフシリーズ，1）

⑦　Walker, G.P.M. : *Russian for librarians.* London, C. Bingley, 1973. 亀山芳子訳『ライブラリアンのためのロシア語』東京，ナウカ，1976. 103p.

があり，それぞれ，東欧の諸言語にも多少は言及している。

ローマ字以外の文字からの翻字について集大成したものとしては，

⑧　*ALA-LC romanization tables : transliteration schemes for non-Roman scripts* / approved by the Library of Congress and the American Library Association ; tables compiled and edited by Randall K. Barry. Washington, Library of Congress, 1991. 216p.

がある。ただし，国際標準化機構（ISO）の方式とは一致しないことには留意を要する。日本では，

⑨　日本図書館協会目録委員会編『日本目録規則. 1965年版』東京，日本図書館協会，1965，p. 185-220「付録6：翻字法基準表」

がある。

## 3.　辞書の引き方

通常，辞書を引くのは，わからない語を調べるためである。ところが，その言語をある程度以上知っていないと，そもそも辞書が引けない場合も多い。通常の辞書は，その言語を既に習得済みの使用者を想定して作成されており，ある種の知識を暗黙のうちに要求してくる。留意事項を凡例等で明示している親切な辞書もあるとはいえ，自明の常識として言及なしで済まされている方が，むしろ通例である。

### 3.1.　言語の識別方法

辞書を引く以前に，そもそも何語で書いてあるのかわからない場合がある。文字が同じアラビア文字でも，ペルシア語その他さまざまな言語の可能性がある。各言語の史的系統関係，構造的特徴，文化背景，地理的分布，現在および過去の使用文字等の概要をあらかじめ知っておくことは，解読の対策を立てる上で有効である[5]。言語名の識別同定には，出版地等の言語外情報の他，出現頻度の高い小辞や語形変化のパターンに注目すべきだが，特定の言語に特有な文字で見当を付ける方法もある[6]。たとえば文字 ř が使われていればチェコ語，ŕ があればスロヴァキア語，という具合に。ただし，これはあくまでも目安に過ぎない。たとえば文字 ð，þ は，現代語ではアイスランド語に特有だが，古期英語にも用いられていた。また，書き言葉を従来持たなかった言語をアルファベットで表記する際に，同じ特殊文字が使われるかもしれない。さらに，正書法（orthography）は，現代でも諸国語でしばしば改訂され続けているし，当該文献が標準的綴字法に従っているとは限らない。キリル（ロシア）文字をやめて民族固有の文字を復活させている近年のモンゴルのように，文字体系を全面的に入れ替える例も，歴史上稀ではない。

### 3.2.　○○語辞典の代わりに××語辞典を使う

言語の区分には，政治的・社会的要因も関わっているので，別々の言語名で呼ばれる複数の言語が実用的には大差のない場合がある。逆に，独立別個の言語間の差異に匹敵するほど互いに異なる諸「方言」が，ひとつの言語名のもとに一括されている場合もある。また，ひとつの言語についても，いろいろな別名を持つことがある。たとえばフィリピンの国語フィリピノ語は，かつてピリピノ語と称し，実体はほぼタガログ語といえる。

また，インドネシア語とマレーシア語は，共にムラユ（マレー）語を基礎に両国でそれぞれ国語化されたもので，双子のような関係にあり，辞書は互いにかなりの程度の代用が効く。

### 3.3.　辞書の見出し語を推定する

実際の文章中に現れる単語は，しばしば，辞書の見出し語そのままではなく，文法上の活用や接辞の付加で変形している。さらに，それに伴う音韻上・正書法上の変化も考慮する必要がある。

活用変化する部分が主として語尾に限られる言語では，文字さえ読めれば，特別な予備知識なしでも，とりあえず辞書を引いてみることは比較的

容易である。ただし，たとえばラテン語の rerum やドイツ語の aufgestanden という語形を見たとき，辞書の見出し語として res（事物），aufstehen（起きる）を見いだすには，前者は名詞の複数属格，後者は動詞の過去分詞，といった判断をくだす程度の文法的知識は要求される。また，ドイツ語の正書法は，他の多くの言語であればいくつかの単語に分かち書きするようなところを，ひとつながりの語として表記する傾向がある。その結果，辞書の見出し語にない長い複合語が頻出することになり，語構成要素の区切り目を見極める判断力を要する。

語形変化が語頭に及ぶ言語では，辞書が引けるようになるまでが一苦労である[7)]。たとえばアラビア語では，単語は多くの場合３子音から成る語根を有し，語根の前後への接辞の付加や語中母音の交替によって活用形や派生語が生じる。文中に現れる語形 maktabah（図書館・書店），takātaba（彼は文通した），yuktabu（それは書かれる）等を，それぞれ辞書の m, t, y のページで捜してもみつからない。語根 ktb を見出し語として検索するのである。

また，たとえばインドネシア語では，接頭辞・接尾辞を適切に見抜いて取り除かないと辞書は引けない。さらに，語幹の冒頭の音は，接頭辞との間の同化作用で規則的に交替している場合がある。menyurati（手紙を書く），penulis（著者）は，辞書ではそれぞれ，見出し語 surat（手紙），tulis（書く）のもとに派生語として記述されている。

### 3.4. C がアルファベットの３番目とは限らない

文字の配列順序は，各国語の歴史的成立事情のもとに決まったものなので，言語によって微妙に異なる。文字体系が全く異質なものなら，我々もそれなりに覚悟して辞書を引くものだが，表記がラテン・アルファベット（ローマ字）だと，つい気を許して，a, b の次には当然 c と期待してしまいがちである。ところが，たとえばフィリピノ語では，a, b の次は k であり，c は y に続く21番目に配列される。

配列上，２文字組で１文字扱いとなる文字を持つ言語もある。たとえばスペイン語では，ch, ll がこれに該当する。また，ñ は n とは別個の文字なので，配列は，calor（熱），calle（街路），cuneta（側溝），cuña（楔），chile（唐辛子）という順になる。大型の事典を使用するときは特に，載っているはずの語を見落としてしまわないよう，注意を要する。

ドイツ語のウムラウト(ä, ö, ü)は，辞書では普通の a, o, u と一緒に配列するが，書誌では ae, oe, ue と綴られているものとみなして配列するという慣習がある。北欧の諸言語の ä, æ, å, ö, ø は，それぞれ，a や o の直後ではなく，アルファベット順の終わりの方に配列される。配列は，辞書の作られた年代によっても異なる場合がある。å は昔は aa と綴り，辞書でも普通の a が２つ続いただけのものとして配列していた。また，正書法が未確立の（あるいは制定後まだ日が浅い）言語や，古い時代に書かれた文献を読むときは，テクストの綴りが，その辞書の採用している正書法ではどの文字に対応するのかを推理する必要のある場合もある。

## 4. どんな語学マニュアルが必要か

### 4.1. 諸言語の取扱説明書として

外国語の習得には多大の労力を要し，しかもなかなか使いこなせるまでに至らないのは我々の経験するところである。外国語の学習方法[8)]については，古来さまざまに論じられてきた。効果的に学ぶコツや合理的な教え方の方法論があるとはいえ，それに加えて，学習者自身がそれ相応の時間と労力を費やして努力しなければ，読み・書き・話すといった運用能力の習熟までは不可能という点は，諸家の見解の一致するところのようだ。しかしながら，いわゆる「マスターする」ことを目指して「習うより慣れろ」式に努力することは別次元で，とりあえず辞書が引けてだいたいの見当がつく程度に「分かる」ための，プラグマティックな早見表のようなものがあってもよいのではなかろうか。

個別言語の入門書は通例，漸進的に段階を追って学習するように構成されている。てっとりばやく概略だけ知りたいときには不便である。前掲④の副書名に列挙されているような専門的な職業に

従事する者のみならず一般に，不案内な言語で書かれた文献について簡単な調べ事をしようとする際にひろく役立つような，実用を旨としたマニュアルがあれば便利だろう。たとえば外来語の原義を辞書で調べる，研究者が引用文献の原文を確認する，図書館員が目録を作成する，といった当座の用にかろうじて足りる程度の技術の手引である。

マニュアルの記述には，分かりやすさをこころがける必要もある。電気機器の取扱説明書と同様である。特別な予備知識なしで初めて対処する場合でも，マニュアルを見ながら順を逐って操作していけば，とりあえずの目的に到達できるよう工夫するのである。説明に使用する専門用語は，利用者に「常識」として要求しないよう，別途一覧のかたちで解説しておきたい。学習書や辞書に現れる文法用語には不統一が見られる。同じ概念を表すのに別の用語が使われてとまどう場合がある。たとえば属格（genitive）のことを英文法で「所有格」，ドイツ語文法で「2格」，ロシア語文法で「生格」と称するといった，「お国なまり」の慣習がある。また，執筆者個人の独自の用語が使用される場合も少なくない。現に既に存在する各種の入門書・文法書・辞書の利用者である我々としては，使用されている主な文法用語は，一覧対照表にまとめておく必要がある。

### 4.2.　マニュアルの不足している分野

特に必要性を強く感じるのは，アジア・アフリカの諸言語についてのマニュアルである。たとえばアラビア語の翻字法の場合，米国議会図書館の方式[9]は，文脈や発音に基づく細則を多数含んでおり，かなりの文法的知識を駆使しなければ使いこなせない。一般の文法書等を読んでも，翻字の実際についてまではあまりよくわからない。ヨーロッパ系以外の諸言語は，辞書や学習書も種類があまり多くなく，かつ入手困難な場合が多い。マニュアルその他が整備されていないのも需要が少ないからであって，要するに，実際に取り扱う頻度の低い言語のためにまで対策を用意しておく必要はない，という考え方もありうる。しかし，頻度の低い言語ほど，手引書なしで対処するのは困難である。各国の公用語については，ひととおりのマニュアルが欲しい。

他方，ヨーロッパ系の諸言語については，便利なマニュアルも各種公刊されており，また，語形変化も語尾に集中する傾向があるので辞書も比較的引きやすい。しかし，少し時代を遡った出版物に対処する場面では，我々はたちまち混乱してしまう。たとえば英米目録規則第2版の2.14Eにいう「ある種の文字の転記」，すなわち，大文字I, J, U, Vを小文字に転記する際のi/j, u/vの使い分け，および，それに伴う索引の綴りをどうすべきかは，判断に迷うところだ。ラテン語[10]を中心として，その他の諸言語についても古い時代の特徴・慣行を，出版・印刷文化史の基礎知識も含めて解説したマニュアルが必要と思う。

### 4.3.　継続的な改訂の必要

一般に，あらゆる情報には誤りの含まれている可能性がある。いかに「権威ある」辞書・事典といえども例外ではない。広汎な対象を網羅しようとすれば正確を欠く箇所も増え，特殊文字の印刷には誤植が忍び込む。本稿で言及してきた各種マニュアル・事典類も，信頼性の高低はそれぞれに異なるとはいえ，誤記の可能性を想起しつつ批判的に利用すべきものである。また，言語は時代と共に常に変化してやまない。マニュアルは，作成と同時に古くなり始める。誤った箇所を訂正し，古くなった部分を書き直し，といった改訂の小回りが効くよう，小項目ごとに差し替え可能な加除式の形態，さらには，電子メディアでの提供へと進むべきだろう。

更新をシステム的に継続する体制を確立しておくことは，語学マニュアルに限らず，業務上の文書管理（records management）一般において，極めて重要な要素である。篤志の個人が，ある時点でいかに立派なマニュアルを作成しても，後任者が代々引き継いでいけるような工夫を組み込んでおかないと，内外の環境の変化により，実状に合致しない箇所が短時日のうちに累積していく。当該文書の維持・更新に関する責任の所在を明示するとともに，改訂作業を容易に実行できるような文章構成と物理的形態を設定しておく必要がある。

## 5. 知識の共有財産化へ向けて

### 5.1. NACSIS の充実のためにも

学術情報センター（NACSIS=National Center for Science Information Systems）の総合目録データベースには，さまざまな規模・館種の図書館が参加している。新規書誌作成の場合は，個々の図書館の入力したデータが，そのまま全国ネットで公開される共有財産としての書誌レコードとなる。目録作成者の心情としては，自信のない言語の資料については，入力を差し控えたくなる場合がある。特殊文字を手軽に入力できるような機器環境の開発の問題とともに，語学力の水準向上（対個人の研修という次元ではなく，容易に利用可能な参考ツールの整備という意味で）についても，図書館界全体で対策が講じられることが望まれる。図書館間相互貸借（ILL=InterLibrary Loan）を前提とした分担収集という基本構想の観点からも，ユニークな資料こそ積極的に入力されるべきである。

### 5.2. 個人や1館の枠を越えて

いわゆる「特殊言語」による資料を扱う頻度の低い一般の図書館の場合は，目録対象資料の使用言語がなじみの薄いものだったときは，その資料を処理する巡り合わせに「当たって」しまった担当者個人が，その場限りの調査・学習で対処せざるをえないかもしれない。多大の時間を費やして苦労した末に，できあがった目録データは初歩的な誤りだらけ，といった悲劇も起こりかねない。個人の努力・勘・経験や，たまたま持ち合わせていた知識・技能に依存するのではなく，担当者が次々に交代しても目録・索引の一貫性が多年にわたって維持できるよう，業務マニュアルのかたちで技術知を継承していくことが必要である。

しかし，具体的な事例に出会う機会の少ない一般館が個々に作成するマニュアルでは，内容的にも自ずと限界がある。多様な言語による資料を日常的に多数扱う，専門性の高い図書館には，それ相応の技術知の蓄積があることと思う。各専門館の衆智を結集し，図書館界全体の共有財産として利用できるようになれば，一般各館の目録データの品質，作業効率も向上するだろう。また，各館の目録・索引が標準化されることは，検索する利用者にとっても有益である。

### 5.3. ネットワーク上の語学マニュアル構想

現時点の機器環境ではまだ実現困難と思うが，特殊文字をそのまま扱える機器が普及・標準化すれば，たとえば NACSIS のネットワーク上に，語学マニュアルを構築することも考えられる。構成は，幹事役の管理・更新する公式ファイルと，書き込み自由の会議室ファイルとする。公式ファイルには，たとえば言語名と言語コードの対応表や，特殊な暦から西暦を知る変換プログラムを組み込むこともできよう。会議室ファイルは，パソコン通信の電子掲示板のような方式で，改訂案の提起・検討の他，参考文献の新刊情報，諸国語の正書法の改訂等のニュースも扱う。

NACSIS-IR 等の一般利用者もアクセスでき，かつ，発言もできるようにしておけば，互いに有益な情報を交換することが期待できる。図書館界という狭い枠組みで閉じることなく，出版・報道・行政等，多言語処理の技術的知識を必要とする各界とも連携したシステムが望ましい。

## 6. おわりに

整備された語学マニュアルは，時間と労力を節約するのみならず，業務の品質も向上させる。各館が個別に伝承してきたマニュアルや，個人の頭の中にあって未だ文書化されていない技術知が，少しずつでも共有財産として公開されていくことを希望したい。

**注・参考文献**

1）亀井孝，河野六郎，千野栄一編著『言語学大辞典』第1巻-第5巻「世界言語編」 東京，三省堂，1988-1993の「序説」の「2. 言語の数」（第1巻，p.xiv-xvi）を参照。なお，同書は，世界の言語を列挙・概説した図書として当代最大規模・最高水準で，3千5百余の言語に言及している。ただし，文字の実際については，以後の巻に続刊予定の「世界文字編」に譲っている。また，田中克彦，H. ハールマン（Haarmann）著『現代ヨーロッパの言語』 東京，岩波書店，1985. 208p.（岩波新書，黄版292）は，言語人口の正確な統計の原理的な不可能性や，国家と民族の関係にも論及している。

2）すべての自然言語は，話し言葉としては，意思疎通のあらゆる必要を満たす十全な表現力を備えている。けれども，

出版物に常用されるに至ることは，書き言葉としての標準化，および，日常生活の場面を離れた科学技術・政治・学術・文芸等の語彙の増補といった，人為的な整備の努力を経て初めて可能となる。土着の言語を公用語化することの困難については，Coulmas, Florian : *Sprache und Staat*. Berlin, W. de Gruyter, 1985. 山下公子訳『言語と国家：言語計画ならびに言語政策の研究』 東京，岩波書店，1987を参照。また，同書 p.70-95「民衆語の近代化と定律化」にも言及されているように，西洋近代の諸言語の場合も，ラテン語に代わって書き言葉として用の足りるものとなるまでには，営々と整備に努めた人々があったのであり，なりゆきまかせで自然発生的に発展したわけではない。

3）暦の会編『暦の百科事典』 東京，新人物往来社，1986. 509 p.，および，小島麗逸，大岩川嫩編『「こよみ」と「くらし」：第三世界の労働リズム』 東京，アジア経済研究所，1987. 256p.（アジアを見る目，73）等を参照。

4）島村修治著『世界の姓名』 東京，講談社，1977. 442p.，および，アジア経済研究所，企画；松本脩作，大岩川嫩・編『第三世界の姓名：人の名前と文化』 東京，明石書店，1994. 414p. 等を参照。

5）各言語に2ページずつを充てて紹介している読み物に，「朝日ジャーナル」編『世界のことば』 東京，朝日新聞社，1991. 229p.（朝日選書，436）がある。新潮社の広報誌『波』も，26巻1号（1992年1月号）から「世界の言語」を連載中。また，大修館の月刊誌『言語』の，11巻5号，p.33-111（1982.5）；11巻 6 号，p.33-113（1982.6）「創刊十周年記念特集：外国語のすすめ」，および，20巻5号，p.17-89（1991.5）；20巻6号，p.17-87（1991.6）「特集：世界の言語70＋1」には，辞書や学習書の紹介もあって便利。さらに，柴田武編『世界のことば小事典』 東京，大修館，1993. 562p. は，前掲「世界の言語70＋1」を127＋1に増補改訂したもの。

体系的な概説書としては，『講座言語』 東京，大修館，1979-1981の第5巻：西田龍雄編「世界の文字」，第6巻：北村甫編「世界の言語」等がある。文字については，世界の文字研究会編『世界の文字の図典』 東京，吉川弘文館，1993. 605p. をも参照。

6）前掲②『洋書目録マニュアル』p.140-142「特殊言語の判別」；同書 p.156-168「南方アジアの言語」；⑥『ロシア語図書目録法入門』 p.144-150「キリル文字を使う言語の見分け方」；⑦『ライブラリアンのためのロシア語』p.64-69「東欧諸言語の同定」。前注に掲げた『世界の文字の図典』をも参照（特に p.186-198）。また，識別同定という実用に徹した早見表 Gilyarevsky, R.S.; Grivnin, V.S.: *Languages identification guide*. Moscow, Nauka. 1970. 343p. は，各種の索引を装備している（Определитель языков мира по письменностям／Р.С. Гиляревский, В.С. Гривнин の英訳版）。

7）奴田原睦明「アラビア語の辞書とその周辺」岩波新書編集部編『辞書を語る』 東京，岩波書店，1992, p.176-184（岩波書店，新赤版211），および，西江雅之「引けない辞書」西江雅之著『ことばを追って』 東京，大修館，1989, p.121-135等を参照（後者の例はスワヒリ語）。

8）千野栄一著『外国語上達法』 東京，岩波書店，1986. 215 p.（岩波新書，黄版329），および，澤田昭夫『外国語の習い方：国際人教育のために』 東京，講談社，1984. 273p.（講談社学術文庫，666）等を参照。

9）前掲⑧ *ALA-LC romanization tables*, p.4-13 “Arabic”. なお，⑨『日本目録規則．1965年版』p.186-196「アラビア語翻字法」も，おおむね同一の方式。

10）前掲⑤*A manual of European languages for librarians* では p.125-145が “Latin”。③ *Manual of foreign languages*, p. 129（または④p.165でも同じ）“Latin incunabula” には，独特の略字の一覧がある。ローマ数字については，前掲②『洋書目録マニュアル』p.169-171が詳しい。

（1994. 5. 6 受理）